

## 授業「取材論」の実践と課題

間 島 貞 幸

【要約】 本稿は、2014 年度に開講した授業「取材論」の実践について報告するものである。2017 年度の授業を振り返り、明らかになった課題について考察し、本授業の標準化を目指す。

【キーワード】 取材 インタビュー 活字メディアの取材 映像メディアの取材

### 1. はじめに

筆者は2009年度より映像制作がもたらすコミュニケーション能力をはじめとする社会人基礎力の発達について実践研究を行っている。映像制作の実習授業では理論よりも学生の制作指導に追われることが多く、取材に関する理論や手法についての講義形式の授業の必要性を感じていた。こうして2014年度より新たに「取材論」を立ち上げることになった。

メディア情報学部では2年次で映像・音響メディア分野、デジタルデザイン分野、図書館・アーカイブズ分野から一つ選択し、専門的に学んでいく。

当初「取材論」は、映像制作における取材やインタビューの知識や理論について学ぶための授業と考えていた。ところが読売新聞の就職活動に関する記事(2013年6月18日付)『営業であれ、企画であれ、ビジネスの現場では「取材力」が求められます。いろいろな人に会って聞き取り調査をし、書籍などでデータ、事実を調べる。(中略)相手のことを知るのには、ビジネスの基本。』を読んで、単に映像制作のためだけでなく、学生にとって避けては通れない就職活動を行う上で、「取材力」を身につけることが重要であること、また学生がサークル活動や地域の人、他大学の学生との連携プロジェクト、アルバイト等で出会う人たちと円滑にコミュニケーションをはかるために「取材力」が

有効であることを知り、映像・音響メディア分野志望以外の学生も「ぜひ受講したい」と思える授業内容を考えることにした。そして狙い通り、開講1年目(2014年度)から映像・音響メディア分野を志望する学生以外からも多くの学生が受講することとなった。

以来、学生の反応を見ながら毎年少しずつ、授業内容を変更しながら今日に至っている。

2017年度で4回目の「取材論」を終えた。次年度以降、より充実したプログラムとなるよう2017年度の実践内容を振り返り、その成果や課題について明らかにする。

### 2. 授業の概要

#### 2.1 授業計画

授業目標は、なるべく多くの学生が受講するよう「取材を通じて人とつながり、わかりあう」とした。これは、もともと想定していた映像メディアや活字メディアにおける取材方法を専門的に学びたい学生に加え、初対面の人とも気軽に話することができるよう取材力を身につけたい学生を想定したためだ。

全15回の授業は、初回のガイダンスと最終回のまとめを除いて3つのパートに分けた。パート①は人と人が出会う際に必要な取材力について(第2回～第4回)、パート②は活字メディアにおける取

材方法について(第5回～第11回)、そしてパート③は映像メディアにおける取材方法について(第12回～第14回)である。

本授業のメインは、パート② 活字メディアにおける取材方法についてである。映像メディアにおける取材方法については3回のみとし、さらに詳しく学びたい学生には、映像制作のゼミを志望する学生を対象としたプレゼミナール(2年次対象)

で行うことにした。成績評価のための課題レポートは、テーマに沿った人物を取材して記事にまとめてもらうことにした。

本授業を通じて理論を単に学ぶだけでなく、実際に取材力を身につけて欲しいと考え、理論を学んだ後に、学生同士で取材したり、話し合ったりする機会をできるだけ多く実施することにした。以下は、2017年度の授業スケジュールである。

表1 授業スケジュール(2017年度)

第1回(4/12)	ガイダンス
第2回(4/19)	取材の魅力～相手の良いところを見つける(1)
第3回(4/26)	学生同士で相手の良いところを見つける(2)
第4回(5/10)	相手の良いところを見つける(3)取材内容をレポートにまとめ、発表する
第5回(5/17)	聞き上手になる(1)テレビの世界の聞き上手とは
第6回(5/24)	聞き上手になる(2)先生が取材する～学生が取材する
第7回(5/31)	聞き上手になる(3)取材内容を発表する
第8回(6/7)	聞き上手になる(4)別テーマでもう一度学生が取材する
第9回(6/14)	取材して記事を書く(1)課題レポート内容発表、作成の進め方
第10回(6/21)	取材して記事を書く(2)「幼い頃の私」をテーマに記事を書く
第11回(6/28)	取材して記事を書く(3)課題レポートのまとめ方
第12回(7/5)	テレビの取材方法(1)映像メディアと活字メディアの取材方法の違い
第13回(7/12)	テレビの取材方法(2)街頭インタビューの実践
第14回(7/19)	テレビの取材方法(3)街頭インタビュー内容チェック
第15回(7/26)	まとめ 課題レポート提出

## 2.2 授業の実践

2017年度の受講者数は52人(2年次生37人、3年次生12人、4年次生3人)だった。

第1回目で、授業「取材論」の概要について説明した後、20分のドキュメンタリーを視聴した。これは受講生と同年代の、生きる目的を見失った若者が主人公で、仲間たちとの共同生活を通じて生きがいを見出し、自信を取り戻す内容で、20代の若いディレクターが取材・制作した作品である。

同年代の若者が成長していく過程を見ることで一人でも多くの学生が映像メディアの取材の魅力を感じてほしいと、この作品を選んだ。授業後のリアクションペーパーには、好意的な作品の感想とともに、「どうやって取材相手と仲良くなるのか」「どうやったら本音が引き出せるのか」など多くの質問が寄せられた。

パート①(第2回～第4回)では、『人と人が関わる上で、特に初対面では自分も緊張するけれど、相

手も同様に緊張すること』、『人には誰でも長所と短所があり、相手の長所を見て付き合っていくとうまくいくこと』を伝えた。その後、時間が許す限り、学生同士で「相手の良いところ」を見つけて、発表することを繰り返し行った。実際にやってみると学生からは、「相手の目を見て話せない」「相手を前にするとうまく質問が出てこない」「一つ質問した後、無言になって間が空いてしまい気まずくなった」などの感想が寄せられた。さらに後日、アドバイスをして取材させる機会を増やしていくと、「無言になっても気にする必要はない」というスタンスで取材する学生が増えていった。

パート②(第5回～第11回)では、みんなが「聞き上手になる」ことを目指した。テレビの人気司会者がいかに聞き上手か、トーク番組をいくつか視聴して、それぞれの人気司会者の聞き上手のポイントを分析して発表させた。次に、筆者がひとりの学生を対象に取材のデモンストレーションを行い、受講者にその様子を分析させ、発表させた。

次に、聞き上手のコツをある程度理解した上で、学生同士で取材した。取材を通じて初対面の相手の魅力を発見したり、以前から親しかった友人の意外な一面を知ったりなど取材の魅力を感じる学生が増えていくと実感した。

本授業は水曜の4限(15:00～16:30)実施だったが、1限から授業を受けている学生にとっては疲れを感じやすい時間帯であり、また昼食後の眠気に襲われやすい時間帯でもあると考え、実際に取材する時間を5分、休憩の時間を3分と決め、こ

れを90分の中で相手を変えながら繰り返し行うことで緊張感と集中力を維持して臨めるよう努めた。取材を重ねるうちに学生から「もっと相手を深く取材したいので一人当たりにかかる時間を長くして欲しい」との声が多くあがるようになったため、途中から取材時間を倍の10分で行うことにした。

パート②の後半では、課題レポート作成のために実際に外部の取材相手を探して取材し、記事を書く進め方についての指導を行った。これについては後ほど詳しく述べる。

パート③(第12回～第14回)では、映像メディアにおける取材方法について、特にこれまで学んだ活字メディアの取材方法との違いを明らかにしながら指導した。その後チーム分けをし、チームごとにビデオカメラを渡して、テーマを決めてインタビュー取材を実施した。取材した映像素材は、緊張して間が空いたり、言葉に詰まって質問がうまくできなかつたりする部分をあえて残し、筆者がチームごとに編集して上映した。これは取材相手へのアプローチの仕方、聞き手のリアクション、取材相手の気になるコメントに対していかに深く掘り下げるかなど取材する側の葛藤や工夫について考えて欲しいという意図である。学生たちはスクリーンに映し出される自分の様子を時には笑ったり、時には沈黙したりして「取材する側」と「取材される側」について分析し、その結果を発表した。

全15回の出席者数の推移は以下の通りであった。

表2 出席者数の推移 (全52人中)

4/12	4/19	4/26	5/10	5/17	5/24	5/31	6/7	6/14	6/21	6/28	7/5	7/12	7/19	7/26
39	45	45	43	45	46	47	45	47	47	49	48	47	47	48

### 2.3 課題レポート

成績評価は、毎回授業の最後に提出するリアクションペーパーと課題レポートで評価した。課題レポートは本授業で学んだことを活かし、実際に取材して記事を書いてもらうことにした。内容はな

るべく身内でない年上の人(できれば30代以上)を取材対象として、「20歳の頃どんな生活をしていたか、どんなことを考えていたか、どんなことに悩んでいたのか、失敗談、もう一度20歳を過ごすとしたら何をしたいか、20歳の自分に言いたいこと

など聞き出して 3,000 文字以上の記事にまとめる」ことである。これは取材を通じて学生たち自身が、まさに20歳の現在とこれからをどうやって生きていくか、考えるきっかけになることを狙ったものだ。

取材する上で意識することと記事にまとめて提出する際のポイントを以下にまとめ、学生に伝えた。

#### 取材する上で意識すること

- ・何のための取材・インタビューか、明確か
- ・質問項目を事前に考えたか
- ・インタビューの流れを考えたか
- ・感謝の気持ちを持って臨んでいるか
- ・時間をいただくことの意味を想像したか

#### 記事にまとめる際のポイント

- ・読み手にわかりやすい構成、文章になっているか
- ・伝えたいことが明確か
- ・誤字脱字がないか
- ・きれいにプリントされているか

こうして最終回の授業で学生47人分の課題レポートが提出された。取材対象者の内訳は、①駿河台大学の教職員7人、②両親や親戚20人、③アルバイトや個人の活動などで知り合った人20人であった。③の中には偶然立ち寄った食べ物屋さんのご主人を気に入り、その場で取材交渉した学生やSNSを通じて映像業界で活躍するプロと初めて連絡をとり取材した学生もいた。記事を読んで筆者が知っている大学教職員の意外な一面を知ったり、まったく知らない人でも興味深い発見が多かったり、すべて力作といえた。

### 3. 授業を終えて～学生の感想と意見

#### 3.1 学生の感想

- ・授業内で知らない人と話すことが多かったので当初は「嫌だな」と思ったが、経験を重ねていくうちに慣れていき楽しくなっていた。
- ・取材したり、取材されたりするのは初めてで楽

しかった。せっかく相手が答えてくれたのになんの反応もせずに次の質問をするとなんともなく寂しい感じがした。質問することが難しいことだとあらためて感じた。

- ・初対面の人と話すことが苦手だったが、この授業を受けて自分から話題を提供したり、質問をしていくことの大切さを学んだ。
- ・「取材」はただ人に話を聞いてまとめるだけのものと思っていたが、聞くときにうなずいたり、相づちを打ったりすることが大事だと学んだ。
- ・「取材とは何か」を考えるきっかけになった講義だった。実際にやってみると、うまくいくこと、いかないことを体験できたのでとても有意義だった。
- ・人と関わっていくことって大切だなと気づかされた。
- ・お互いに取材することで、取材する立場と取材される立場を理解することができた。
- ・相手から話を聞き出すことは簡単なことではない、と実感した。この授業をきっかけに聞き上手になりたいと思うことができた。
- ・せっかく取材をしてもそれをうまくまとめて伝えることができるかが大事になってくるので、そこが取材のおもしろい部分であり、むずかしい部分でもあると思った。
- ・取材していろいろな人の価値観を知るのがおもしろかった。
- ・取材することはむずかしいと感じたが、相手から深い、おもしろい話を聞けるととても楽しく制限時間の10分が短く感じた。

#### 3.2 学生の意見

- ・毎回、先生が取材テーマを提示してくれたが、たまには学生が考えたテーマで取材してみたいと思った。
- ・1回の取材制限時間が5分ではなく、もう少し長く時間をかけて取材したかった。
- ・取材する際のチーム分けに時間がかかったので、配布プリントにチームのアルファベットや数字

を書いておくとその後のチーム分けがスムーズにいくと思った。

- ・たまには教室を出て、他の学生や教職員に声をかけて取材するのも良いと思う。
- ・ペアを組んでお互いに取材した後で、「インタビューの仕方はどうだったか？」など聞いて見るのも勉強になると思った。

#### 4. 考察

毎年最後の授業で学生から本授業の感想や改善点などレポートにまとめて提出させ、翌年に反映してきた。もちろん学生の意欲や理解度により内容や進め方も毎年試行錯誤しながら進めてきた。そして4回目となる今年度はほぼ計画通りに進めることができた。学生から「変わっているけれど、おもしろい授業だ」という声が多数寄せられた。出席率も割合安定していた。それは過去に受講した先輩たちが増えて、「取材論」に関する情報や評判が後輩たちに事前に伝わり、ある程度イメージして受講する学生が多かったためであると考えられる。

筆者の専門は「取材を中心とした映像制作」であるが、この授業を通じて「取材」という行為に興味を持ち、筆者の3・4年の専門ゼミを希望する学生が増えていることはとてもやりがいを感じる。

受講生の意欲や志向、理解度も毎年変わることを念頭に、全ての受講生が「取材の魅力を知り、取材力が身につく」ことを目標とし、今年度の内容・進め方を基本に柔軟性をもって来年度も臨む所存である。

#### 5. まとめ

今年度で一番問題となったのは、取材チーム分けにかかる時間であった。毎回異なる学生でチームを作って取材させようと考えたが、その場でチームを決めるにはあまりにも時間がかかり過ぎてしまい、間延びして肝心の取材時間が少なくなってしまうことが多かった。この問題に関しては、上記にある[3-2 学生の意見]の中のアイデアを生かして次年度は臨むことで解決するであろう。

「映像メディアにおける取材方法についてもっと教えて欲しい」という意見もあった。本来2年次のプレゼミナールで教えようと考えていたが、たまたま2018年度は2年次のプレゼミナールを担当しないこととなった。そのため、2018年度の「取材論」で、例年よりも映像メディアにおける取材方法について教える時間を多くしようと考えている。

「同授業を受講していない学生や教職員なども授業内で取材してみたい」という意見もあった。今年度は授業の進行具合や教職員のスケジュール等の問題で実施できなかったが、2016年度では大学職員に協力いただき、取材対象者として授業に参加してもらったことがあった。普段、受講者同士で取材するのと異なり、ある程度の緊張感を持ちながら取材することで学生の満足度が上がったと言えた。2018年度は、ぜひ外部の人を取材させたいと考えている。

今後より多くの学生が受講することを望み、「取材力」を身につけて、就職活動などに活用してくれることを期待する。

#### 参考文献

1. 藤井誠二『大学生からの「取材学」』講談社(2009年)。
2. 読売新聞「常見陽平の仕事道」(2013年6月18日)。

The practice and the problem of the theory of coverage

by MAJIMA Sadayuki

**[Abstract]** This text reports on the practice of the lecture coverage theory began in FY 2014. In FY 2017, we look back on the issues that have become apparent and aim to standardize the class.

**[Keywords]** Coverage, interview, Coverage of print media, Video media coverage